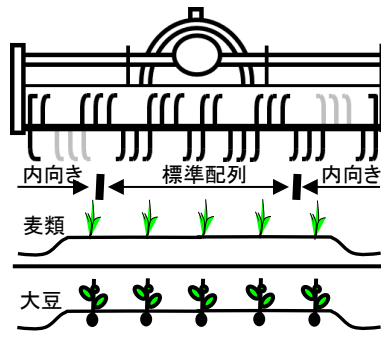


耕うん同時畝立て播種機の汎用利用による 平高畝を活用した麦—大豆体系

目的と特徴

- 耕うん同時畝立て播種機の汎用利用を進めるため、大豆狭畦栽培の導入による麦・大豆の平高畝を利用した体系を開発しました。
- 耕うん同時畝立て播種技術により湿害を軽減できるだけでなく、麦—大豆体系における機械の汎用利用ができるとともに、大豆の狭畦栽培により耕うん爪配列交換を省略し、1工程による適期播種が可能となります。
- 大豆の狭畦栽培により大麦あとの晩播においても生育量の早期確保が可能となります。



- アップカットロータリの耕うん爪の向きを変え、土が畝中心に移動するように調整にすると、高さ約10cm以上の平高畝が耕うんと同時にできます。
- 麦類も大豆も同じ耕うん爪配列で使えるため耕うん爪や播種機の交換が不要です。

耕うん同時畝立て播種機による平高畝を用いた体系は

- 高さ10cm以上の畝に播種するため、湿害軽減
- 1工程化による耕起作業の削減
- 大豆狭畦栽培の導入による耕うん爪配列変更作業の削減

時間的余裕のない作物間の作業競合を解消し、
大麦収穫後すぐに大豆播種できて、生育量の早期確保が可能



収量が向上

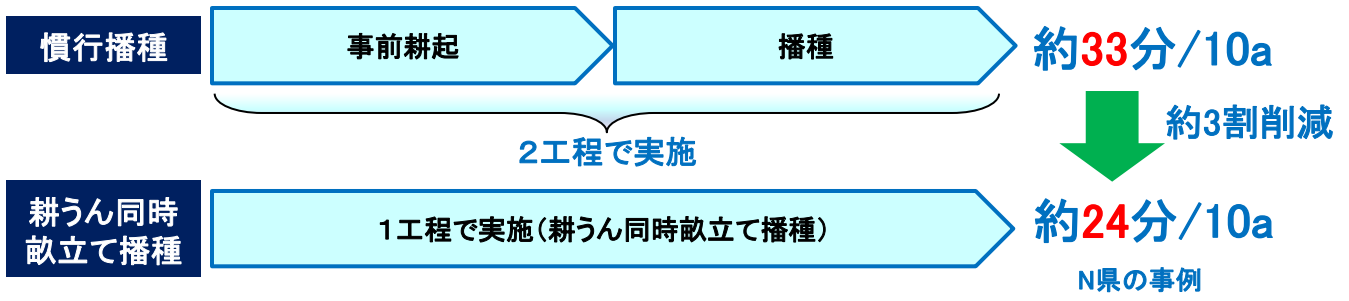
労働時間が短縮
費用が削減

大麦2割以上
大豆1割以上
大豆で5割
大豆2割以上

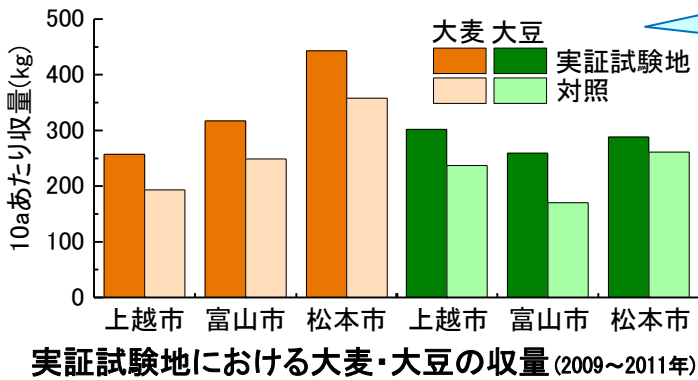
成果

- 麦類、大豆ともに平高畝を利用するため、耕うん同時畝立て播種機の仕様変更が不要です。
- 大麦後晩播でも大豆狭畦栽培により生育量の早期確保が可能で、中耕・培土作業も不要です。
- 平高畝による耕うん同時畝立て播種栽培は現地の慣行方法と比べ、大麦、大豆が増収します。
- 本技術導入により、費用削減が可能です。

慣行播種と耕うん同時畝立て播種の播種方法の比較



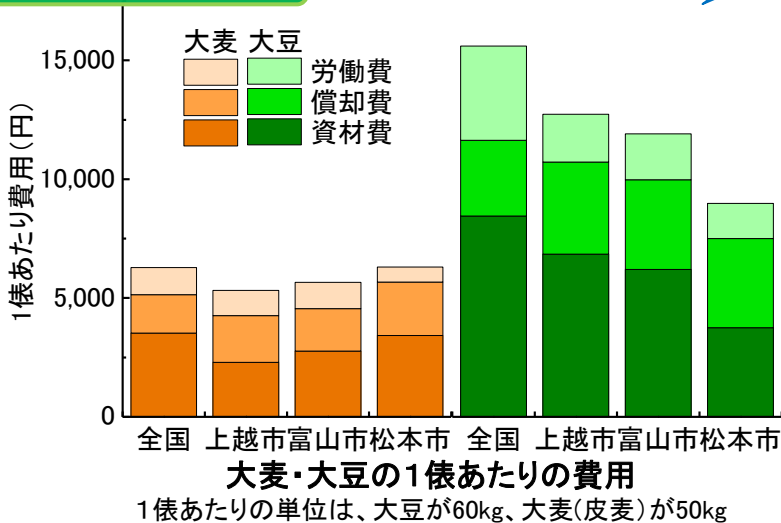
耕うん同時畝立て播種による増収効果



- ・大麦の収量は、3つの現地試験平均で3割(約70kg/10a)増収。
- ・大豆の収量は、3つの現地試験平均で約3割(約60kg/10a)増収。

新技術導入の1俵あたり費用合計は、生産費調査の全国平均に比較して大麦は同等ないし約1割、大豆で2割ないし4割の削減

本技術のコスト



本技術の導入地域

平成24年度
大麦-大豆体系での導入実績
富山県で2経営体約6ha
長野県で5経営体約30ha



対象作物、普及対象

- ・麦類、大豆、都府県

対象農家

- ・水田ほ場で麦類と大豆を輪作して作付けする耕種農家

必要な農機具

- ・ホルダー型アップカッターロータリー、施肥播種機

関連HP

- ・2013年7月公開予定

その他

- ・麦あと大豆晩播狭畦栽培を行う場合には、地域により品種、播種量に留意してください。